地域をつくる
―地域居住学の視点から―

Tatematsu Maiko
立松　麻衣子
奈良教育大学 家庭科教育講座

地域をつくる

－地域居住学の視点から－

奈良教育大学　家庭科教育講座　立松 麻衣子

１．はじめに

地域には人の様々な活動があります。人は地域のなかで生まれ、育ち、老いていきます。地域を舞台にしたそのライフコースのなかで、私たちは、住む、学ぶ、働く、交流するなどを行います。さらに、住むことのなかでは、着る、食べるなどの生命を維持するための行為とそれを支える消費行為を行います。その他にも、遊ぶ、運動する、創る、捨てるなどの文化的行為や、喜ぶ、怒る、愛する、楽しむなどの感情的行為など、私たちは実に様々な活動を地域で行います。そして、私たちの様々な活動を支えるために、地域には様々な機能があります。居住、医療、福祉、教育、学習、雇用、商業、産業、娯楽、文化、環境…。地域には、人々がその人らしさを追求して幸せに暮らしていけるように、人々の活動と機能の質を高め、持続可能な地域を創ることが求められます。

ここでは、住民が地域をつくるということについて、説明していきます。

２．いま地域に求められること

わが国では、都市や地方を問わず、1 人暮らしで生活する人が増加しています。国立社会保障・人口問題研究所が 2010（平成 25）年の国勢調査をもとに将来推計を行った結果では、2010～2035 年の間に、単独世帯の割合は 32.4%から 37.2%へと増加することが予想されています。そのなかでも、65 歳以上の単独世帯は 1.53 倍（498 万世帯→762 万世帯）、75 歳以上の単独世帯は 1.73 倍（269 万世帯→466 万世帯）になることが予想されており、高齢期に 1 人暮

らしになる人が多くなることがわかります。しかし、1 人暮らしは高齢者に限ったことではなく、晩婚化や結婚をしない人が増加する傾向にあることから、どの年齢層においても 1 人暮らしの割合が増加しています。

地域コミュニティの希薄化は、住宅地や住宅形態（戸建住宅・集合住宅）に拘わらず全国的に生じている現象です。都市においてそれが顕著で、1 人暮らしが増加するとさらに深刻な状況になることが考えられます。地域コミュニティの希薄化は、住民の孤立化を生み出しています。最近では、高齢者や女性、子どもの孤立と貧困も地域の問題になってきています。また、地域コミュニティの希薄化は災害時の対応を遅らせることから、今、平常時にも緊急時にも安心して暮らせるコミュニティづくりが地域に求められています。

３．持続発展をめざす地域事例

全国には、「地域の問題はわれわれ住民が解決していかなければ」と動き出している地域があります。それらの事例を概観してみましょう。

case１

「自治会を核にした住民の連帯感が笑顔をつくる」（島根県松江市）

1967 年に分譲されたニュータウン。戸建住宅と集合住宅を包含する一つの自治会によって、住居の形で左右されない生活が送れるように自治運営がされている。また、自治会のなかに高齢者福祉を担う組織を作り、その組織が、定期的な調査の結果にもとづいて地域課題を整理し、必要な取り組みを精査している。そして、自助・共助・互助の取り組みを行いながら、今、小地域福祉活動を進める新しい「向こう三軒両隣」の関係性の構築に向けて動き始めている。

case２

「新旧住民の絆を深めて地域の発展を目指す」（京都市下京区）

京町屋が並ぶ職住共存の地域。1990 年前後、次々とマンションが建ち始め、地域の約 7 割がマンション世帯になった。マンション住民の多くは地域への関心が薄く、今後の防犯力や見守り機能の低下、災害時の対応が懸念された。このような状況に対して、従来の自治基盤である自治連合会がまちづくりの組織

を発足させた。そして、マンション住民が気楽に地域と関わることができるような接点づくりを行い、新旧住民のコミュニティ形成に向けて取り組んでいる。

case３

「商いと暮らしが響き合う豊かなコミュニティを創出する」（京都市中京区）

祇園祭の山鉾をだす伝統地域。祇園祭によって新旧住民の関係性が維持されている。自治連合会とまちづくりの組織が協働して新たな地域組織を作り、地域の分譲マンションを対象にして、マンション間の横のつながりをつくる取り組みを行っている。マンション永住者を増やすことが、地域の伝統を継承していき、コミュニティを再形成することにつながると考え、新旧住民が互いに気持ちよく暮らし、伝統を守っていくことができる地域づくりを目指している。

case４

「重要伝統的建造物群保存地区を守り、誇りを持つ」（奈良県橿原市）

最大規模の重要伝統的建造物群保存地区。江戸時代の町屋のハード（建物）だけではなく、ソフト（文化や生活）を守ることが本物の保存活動だという理念を持ち、町並み保存会のリーダーシップによって住民による保存活動が行われている。活動を続けるうちに住民が自分の地域に誇りをもつようになり、住民による「本物のもてなし」によって外部者を受け入れている。

case５

「『世界一素敵な過疎の町』という逆転の発想」（北海道桧山郡）

人口 5,000 人弱の山間の地域。「過疎」「何もない」ということを逆手にとり、「世界一素敵な過疎の町」をスローガンにした移住交流人口を増やす取り組みを町役場と株式会社が行っている。移住交流の対象は子どもからシニア層まで幅広い。移住交流による外部評価を地域の見直しに反映させることによって、地域活性化とともに住民が暮らしやすい地域づくりにつなげている。

４．地域をつくる共通点

様々な地域事例を整理すると、共通する方向性が見えてきます。それは、「住

民オールキャストで地域をつくる」ということです。

さらに、地域をつくることの共通点を見つけることができます。それは、「組織」「リーダー」「活動」「拠点」「地域資源」「地域づくりの目標」「情報発信・共有」「地域課題」「協働」「仲間」です。この共通点について、以下に説明を加え、図のなかでＡ～Ｊを用いて示します。

＜地域づくりの共通点＞

① 地域を一つにまとめる「組織」＜図 A＞

地域をまとめる組織があり、その組織が地域課題に取り組む舵とりをしている。地域によって組織体は様々で、それぞれの地域に適した組織がある。地域を一つにまとめ舵取りをする組織の存在が地域づくりには重要である。

② 継続的に「リーダー」を担う住民＜図 B＞

地域の組織や自治に関わった経験がある人や地域住民が「組織」（①）のリーダーをしている。リーダーは数年のスパンで務めており、計画的かつ長期的な視点をもって、地域課題（⑧）の解決に向けて挑戦している。

③ 住民が参加できる「活動」＜図 C＞

様々な世代の住民を対象とした活動が企画・提供されている。住民が活動に参加することによって、住民同士に顔見知りが増え、それが見守り・支え合いにつながっている。

④ 組織や住民の活動「拠点」＜図 D＞

高齢者や子育て世代が多い地域では、気楽に立ち寄れる場所の意義が大きい。たとえば、高齢者がそこに立ち寄ることは、閉じこもり防止と安否確認になる。

⑤ 地域の「地域資源」の認識＜図 E＞

地域に対する誇りとアイデンティティを持っている住民を巻き込んで、さらに、地域資源を活用して活動を行っている。

⑥ 「地域づくりの目標」の明確化＜図 F＞

地域づくりの目標が明確に定められており、住民が同じ方向を向いて進むことができている。

⑦ 「情報発信・共有」手段＜図 G＞

地域のこと、住民のこと、地域資源（⑤）、地域づくりの目標（⑥）、地域課題（⑧）などの情報が発信されており、住民がそれを共有できている。

⑧ 「地域課題」を発見し、向き合う＜図 H＞

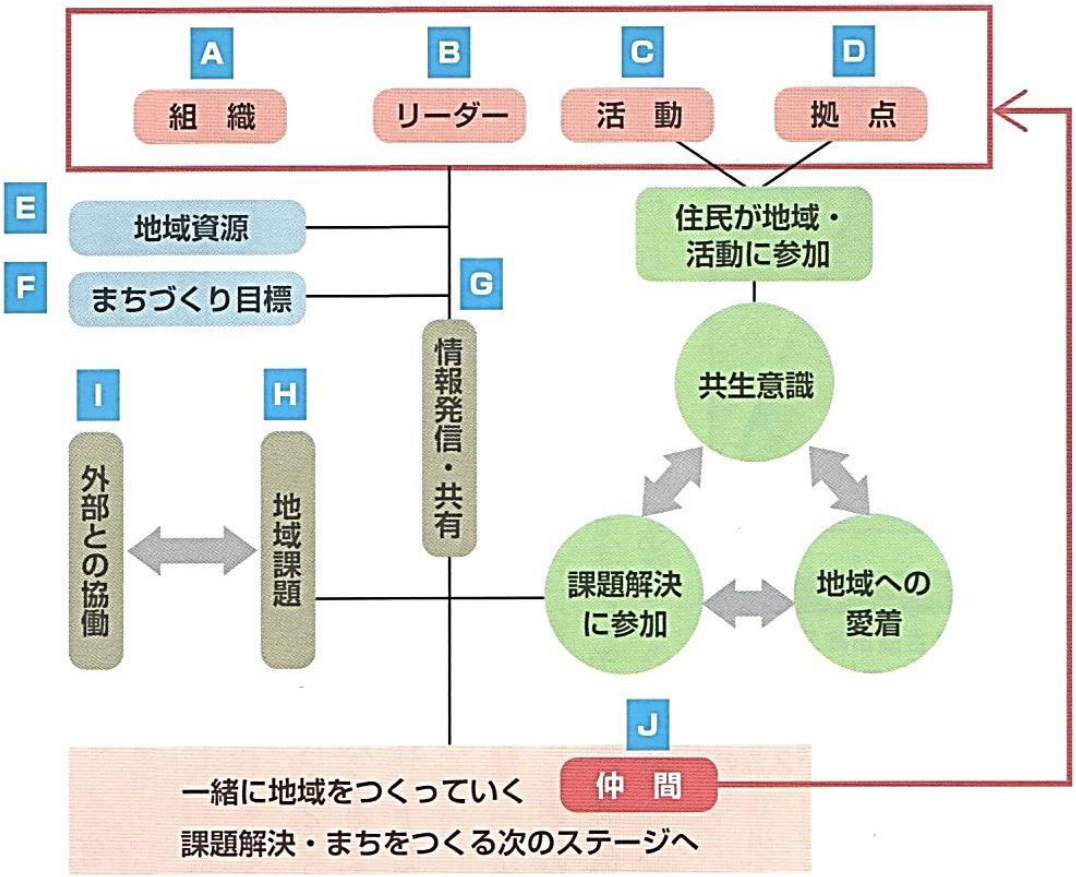
地域の課題が発見されている。そして、調査やワークショップなどから、地域の実態と住民の意見を把握して、それらと向き合い、解決方法の検討をしている。

⑨ 外部機関・団体との「協働」＜図 I＞

自分たちでは解決できないことを認識し、外部の専門機関・団体との協働体制を整えている。外部機関などとの協働の有無は、地域課題（⑧）を解決する時間と質に関係していく。

⑩ 「仲間」の発掘＜図 J＞

様々な活動（③）から、多様で多彩（多才）な人材を発掘し、一緒に汗をかいて地域をつくる仲間を増やしている。人材を地域資源（⑤）と捉えることがポイント。



出典）『地域とつながる集合住宅団地の支え合い―コミュニティ力ですすめる 12 の実践―』
（平成 25 年度厚生労働省社会福祉推進事業「集合住宅団地における孤立を防止する地域の連携に関する調査研究事業」）

図．地域づくりの共通点

５．「人」が地域を発展させる

住民が地域のことを理解し、地域で一緒に暮らしている者同士という共生意識をもつことが大切です。さらに、地域の課題解決に参加することで、地域づくりへの参加意識が生まれ、その地域に愛着を持つことにつながります。地域への愛着は、その地域への永住意識や帰属意識を強めます。このような住民の存在が地域に地域力をもたせます。

また、様々な地域の取り組みから、地域組織の舵取りと住民の地域を愛する気持ちによって、人が守られ、地域が守られていることを学ぶことができます。これが「地域をつくる」ということでしょう。

住民が自分たちの地域をつくっていくなかで、地域のなかに顔見知りが増えていく。これが、平常時にも緊急時にも安心して暮らせるような、「見守り、支えあうコミュニティ」につながっていきます。

６．おわりに

大学では、学生教育に地域の力を借りることがあります。学生が地域の人から学ぶことができる機会を作り、学生の人間力や社会人基礎力の育成を目指しています。地域の力を借りる教育を重ねるうちに、このことは地域にとってもメリットがあることがわかってきました。地域にとっては、学生に教えることで地域の人が自信をもつようになったり、元気になったりすることがあります。また、地域に対する学生の率直な感想（外部からの評価）によって、地域の人が地域資源に気付くことになったり、地域活動が活発になったりしています。

地域には様々な能力をもつ人がたくさんいます。その人たちが地域で力を発揮できることや、外部の者が地域の人や活動を正しく評価することも、地域力をあげて、地域をつくることにつながります。

大学と地域が相互に役割を分担しながら協働をする「役割相乗型連携」は、これからの大学づくりにも地域づくりにも必要になると考えます。

立松　麻衣子（Tatematsu Maiko）

2003 年　奈良女子大学 大学院 人間文化研究科 博士後期課程人間環境科学専攻修了。
　　博士（学術）。
2004 年　九州女子大学 家政学部 講師。
2008 年　同准教授。
2011 年　奈良教育大学 教育学部 准教授。

【研究テーマ】

専門は地域居住学です。特に、「高齢期を地域で暮らす」ということについて、自宅生活や施設生活、地域コミュニティなど様々な角度から調査や実践をしています。

著書等に、「これからの配食サービス－高齢者の食を地域で支える－」（共著・かもがわ出版）、「地域居住とまちづくり」（共著・せせらぎ出版）、「地域とつながる集合住宅団地の支え合い―コミュニティ力ですすめる 12 の実践―」（共著・CLC）（2014）など。

地域をつくる ―地域居住学の視点から―

著者　立松（たてまつ）　麻衣子（まいこ）
2015 年 3 月 31 日 第 1 版
奈良教育大学出版会
〒630-8528
奈良市高畑町
TEL: 0742 (27) 9135　FAX: 0742 (27) 9147
E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp
URL: http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/